

レポート2 「田戸～瀬～玉置口」

■田戸（たど）

北山村小松集落から、ボートで川を下ること約7キロ、田戸の集落が見えてくる。田戸と言ってもあまり馴染みが無いかも知れないが、瀬崎観光ウォータージェット船に乗ると、一度だけ川原に降りて休憩する所というと、理解していただけるだろうか？和歌山県と三重県と奈良県の3つの県境のすぐそば。田戸は奈良県十津川村だ。

私は、生まれも育ちも新宮市熊野川町なので、子供の頃は、よく瀬崎に遊びに行ったものだ。

当時中学生の私は、一人で片道だけウォータージェット船の切符を買い、バッグに弁当と水筒、そしてゴムボートを詰め込み、船に乗って田戸まで行くのだ。遠くから観光で来た人達は「子供が大きな荷物を持って、どうしたんだろう？」そんな目で見ていたような気がする。

田戸に到着すると、ほとんどの人達は、記念写真やお土産、鮎の塩焼きを食べて、わずかな休憩を楽しんでいた。それを横目に私は、川原で1人せっせとボートを膨らませた。日陰のない川原なので汗びっしょりだ。でも、この後の楽しい川下りのために、必死になって膨らませたのを覚えている。そして、ボートのロープを引っ張って、小松を目指してなるべく上流まで上り、もう疲れも限界にきた頃に、いそいそとボートに乗り込み、流れしていくのだ。スリル満点の急流と、美しい景色で大興奮のアドベンチャー！さっき乗っていたウォータージェット船の乗客が、うらやましそうに見ている事に、少しの優越感もアドベンチャーをより楽しくするエッセンスだった。（良い子はマネをしないでね）



田戸の吊り橋から臨む北山川

この地方では昔、団平船という荷物を運ぶ船が沢山あったそうだ。瀬だけの話ではない。小松から新宮までには沢山の集落があるが、昔は川が交通の要衝だったため 200 隻くらいの団平船があったと聞いた。

その団平船が、新宮からおよそ 60 km 上流の小松に、どうやって上って来たかご存知だろうか？

団平船は 1 隻ではなく、2~3 隻でチームを組み一緒に移動した。急流にさしかかると、数名が河原に下りてロープで引っ張り、上流へ進んでいく。特に冬は、川の水が少なく、水深が浅いところが多くなるので大変だったそうだ。一人は身も切るような冷たい水に胸まで浸かり、船を川の中央まで押し出しながら、川を上って行ったというのだ。寒さしきに、船に一斗缶のようなモノを置き、焚火をしながら上ったというのだが・・・寒かつただろうなあ。

話は戻るが、ボートで川下り遊びを何度かしていたのだが、一度だけ筏に遭遇した事がある。子供だった私は、筏の知識もなく「凄い船だなあ」とビックリした。昭和 39 年に材木を運ぶ為の筏流しは終わっているので、私が遭遇したのは、観光用の筏だ。この筏には多くの乗客が乗っていた。昭和何年だったかは記憶にないが、私が手を振ると皆が振り返してくれたのだけは覚えている。

現在も北山村では観光筏下りがおこなわれているが、小森ダム下流のオトノリ～小松の間だ。昔は今よりももっと下流の田戸まで下っていたそうで、私は偶然その筏に遭遇したという事になる。

先日、瀬でお話を伺ったところ昭和 37 年頃北山村大沼～田戸までボート下りをやっていたとのこと。昭和 37 年というと、筏流しもなくなる事が決まり【次の何かを考えないと・・・】と模索していたのかも知れない。資料によると、ボート貸し出しが 2000 円、舟子（インストラクター・・・？）1 人 1500 円、当時の貨幣価値はわからないが、高かったと思う。携行品は、服を包むビニール・草履・極めて簡単な弁当・割れない水筒・海水着とあった。写真も見せて頂いたが、よく見てもライフジャケットはつけていないよう見える。朝 10 時に大沼を出発し、夕方 4 時に田戸に到着。約 6 時間のボート下り。当時の人にとってはすごく贅沢な娯楽だったのかなあと察する。

今は、観光筏下りが、オトノリ～小松まで。ラフティング（ボート）が、小松～田戸まで。興味のある方は、北山村まで問い合わせてくださいね。

田戸で聞いた話は、まだまだ沢山あるが、キリがないのであとちょっとだけ・・・田戸のお店の人達が口をそろえて「昔の川はキレイだった。深いところも底まで見えた」と言う。

私も昔は、ノドが渴いたら川の水をよく飲んでいた。（良い子はマネをしないでね）

これもお店の人に聞いた話「今年は台風が少なかったからか、お客様は多かったよ。でも昔はもっともっと多かったねえ。子供を背負い店番をしたものですよ。昼寝をさせるのも、商品を置いてある陳列台の下に寝かせたねえ～」

■瀬（どろ）

瀬と言えば【瀬ホテル】 来年創業 100 年を迎えるそうです。

ホテルとは言っても、現在は宿泊は出来ません。創業者のお孫さんが奥様とともに、レトロな雰囲気を生かしたカフェを開業。2 階から見る景色は昔のまま。現在は、道路や橋やトンネルが出来て車で行く事が出来ますよ。是非行ってみて下さいね。



瀬ホテルから見えるジェット船

■玉置口（たまきぐち）

田戸から川を下ること約 2 キロ、そこは和歌山県の飛地・玉置口だ。

玉置口に行った事がある方はどれくらい居るのだろう？ 今でこそ橋もトンネルも出来て、行こうと思えばすぐ行ける場所になったが、昔は行こうにも、そう簡単に行ける所ではなかったのである。

玉置口に行くには徒歩で山を越えたり、渡し舟で川を渡ったり、もしくは川を泳ぐ。とても交通の便が悪い所だった。

私は、小学生の頃何度か玉置口に行った事がある。地図上では直線距離にして約 2 キロだが、当時は道路もトンネルもなかったので、徒歩で山を二つ越え、渡し舟も 2 回乗った。

めちゃめちゃ不便なところだったが、住民も多く小学校もあり、子供達も沢山いたようだ。

少し散歩をしながら、小学生の私が見たの光景を思い出していた。交通が不便で、集落にも細い道しかなかったけど、沢山の人が暮らしていて活気があったなあ。

散歩しながら、日向ぼっこをしているお婆ちゃんや、畠仕事をしている方、川原を散歩されている方などから色々なお話を聞かせて頂いた。

仕事は、林業や、材木を運ぶ人、筏、渡し船など、山や川の仕事が多かったそうだ。玉置神社（十津川村）の近くまで、3 時間半かけて歩いて行き、仕事をしたという方もいた。

昔は玉置川（十津川村）から、一日一度は材木を北山川まで運び出していたそうだ。

玉置口には、筏を専門に組む人が数人、筏師も 10 人くらいいたそうだ。中国の鴨緑江まで筏の出稼ぎに行く人もいたという。

また団平船で荷物を運び生計を立てている船師もいたそうだ。団平船で運ばれるのは、物品だけではない。集落にやってくる花嫁さんや、他の集落に嫁いで行く花嫁さんなど、婚礼にも使われた。

病人・怪我人も団平船で運んだ。急病人なら夜中でも船で運ぶ。船師歴数十年の凄腕船師なら、闇夜にうっすら浮かぶ山の形を頼りに、どのあたりなのかを察して、岩にぶつかる事も転覆することなく無事に新宮まで下ったという。

また子牛を運んだという話も聞いた。玉置口から新宮まで子牛を 5~6 頭運んだそうなのだが、到着するのに 10 時間以上なので色々と大変だったそうである。人間ならちょいと陸に上がり、用を足すところだが、子牛は船の上であろうが関係ないので、ジョボジョ

ボ、ボットンボットンとお構いなしに、やっちゃってくれるのである。それを船師さんが文句を言いながら、汲み出し汲み出し、川を下って行ったという。

団平船は、嬉しい日も悲しい日も見続けてきた。

明治の頃からは、瀬八丁を案内する船師さんもいて、繁盛期には旅館に泊まりきれず、一般の家にも泊めてもらう程だったとか。北山村から下って来た筏師なども泊まるので、玉置口はとても賑わいがあったそうだ。



玉置口から臨む北山川



玉置口に残る木馬道

今でも玉置神社に向かう道や、材木を運んだ木馬道が残っている。熊野古道ではないが、熊野の暮らしが息づいた道だ。歩いてみるのも良いと思う

他にも、玉置口から山を登る事 1 時間 40 分「え！こんな所に」と思える場所に【耳嶋大明神】が祀られている。

耳の神様らしく、穴が空いている石が沢山供えられていた。玉置神社の宮司さんは、今年の春に参拝されたと聞いた。昔は年に一度祭りがあったという話だが、あまりに険しい道のりのため、今では祭りを行なっていないようだ。熊野の険しさを大いに感じる場所なので、登山の装備を万全にして、数人で行く事をお勧めします。



玉置山・耳嶋大明神



耳嶋大明神に供えられている穴の空いた石

玉置口のおばあちゃんから、忘れ去られてしまったであろう【熊野川筏節】と【瀬小唄】を聞く事ができた。いま唄える人は殆どいないのではないだろうか？

☆熊野川筏節

和歌山と～奈良と三重との境を流れる（ヨイショ ヨイショ）

景色優れた～あの熊野川（ヨイショ）

瀬の眺めもよ（コリヤ）九里峡もよ 流して また行きます筏節～（チョイ チョイ チ ヨイヤナ）

朝鮮と～支那[しな]と境の あの鴨緑江[おうりょっこう] 流す筏は（アリヤ）良けれども（ヨイショ）

雪や氷によ（コリヤ）閉じられてよ 明日はまた新義州[しんぎしゅう]に着をせん～

☆瀬小唄

岩にちらちら咲く花は 君が唇 紅の花

瀬のサツキの瀬のサツキ～の紅の花 トロリ トロトロ トロリットナ

（メロディーをお伝え出来ないのが残念です）

●まとめ

この地域は、玉置口や田戸に限らず不便な所が多かったが、昔は多くの人々でにぎわい、みんな親戚のように助け合い暮らしてきた。

日向ぼっこをしていたお婆ちゃんが言っていたのだが、

「昔は野菜は買った事がなく多くつくれば近所に配り、また沢山貰う事も多かった。知らないうちに近所の子供達が上がり込み遊んでいて皆にご飯を食べさせた事も度々。それが普通だった。今は便利になったが、寂しくなった」

昔の活気を取り戻す事は不可能かも知れない。しかし、魅力は沢山ある。もう一度それに目を向けてみようと思う。

平野 皓大

◎次回は玉置口の対岸三重県熊野市紀和町木津呂から熊野川町九重方面に下ります。